

## 中国領新疆パミール山岳地帯のキルギス族の教育事情： フンザとの比較から

辻本雅史  
甲南女子大学文学部

中国領パミール山岳地のキルギス族の放牧中の小さな夏営地を調査した。まず子どもたちの貧弱な教育事情の実態とおおむね悲観的に描かれているかれらのライフコースについて報告する。ついでパミール南側のパキスタン領フンザでの調査報告と比較することによって、中国領キルギス族沈滞の原因をさぐり、民族と国家および宗教の関わりかたについて考える。

### 1 スバシ村の夏営地、ジャンブラック

パキスタンのフンザでの調査を終えたのち、クンジェラブ峠（4600m）の国境をこえて中国領へはいった。われわれは、ムスターグアタ峰の登山口にあたるキルギス族のスバシという小さな村での調査を予定していた。

スバシという村の名は、「水源」あるいは「水

の頭」という意。その村は目の前にそびえるムスターグアタ峰（「氷の父」という意）をおおっている氷河から流れでる伏流水が地表に湧きだしたところに位置している。戸数30戸、人口約240人の、日干れんがでつくられた粗末な四角い民家が並ぶ小さな村である。視界に入る限りでは他に民家はまったく見えない。孤立して存在する村であ



図1 ムスターグ・アタ山とスバシ村（手前）

る。もっとも耕作不能の不毛にちかい高原地帯のこととて、いずれの村もほとんどがいに孤立的に存在しているように見えるのだが。農業は行われず、丈の低い草を飼料とする家畜の放牧が主たる生業となっている。ヤク、羊、やぎのほか若干の馬、ロバ、らくだも飼っている。

ただ6月中旬から9月中旬までの3ヵ月間は、村人の大半が徒歩で2時間弱のさらに山手にあるジャンブラックという夏営地に、放牧のために移住していた。そのためわれわれも予定を変更して、海拔約3,900mの夏営地ジャンブラックに調査地点を移した。住民のパオ（一種のテント）に居候をしての調査となった。

ジャンブラックとは、「生命の水」という意味である。やはり氷河からの伏流水が地表に出現したモレーンの谷間の泉のほりにあった。夏だけの仮の生活ということから、日干れんがの家は3棟のみで、パオが8張たてられており、合計11「家族」がかなり強いつながりをもって生活していた。たとえば昼間の放牧は各戸単位で個別に出るのではなく、数戸分の家畜をまとめて交代で放牧に連れていくことが多く、また婦人たちが余念のない刺しゅうや糸繰りなどの作業も、いくつか

のパオに集って歓談しながら行われていた。なおここでのパオごとの「家族」というのも、通常は同居している老人が村に残っていたり、また親戚の一部が同居していたりして、村での通常の生活単位としての家族と必ずしも一致するものではない。

## 2 スバシ村の子どもたちの学校教育について

中国の学校教育制度は、小学校は修業年限6年制と5年制が併存しており、また入学年齢も満6歳を基本としながら、7歳入学のところもある。その上に初級中学が3年、ついで2年もしくは3年の高級中学の中等教育機関がある。

スバシ村の子どもたちの学校教育も、もちろんこの学制にもとづいている。ただ30戸のみの小さなスバシ村の小学校には2学年までの学校施設しかなく、3年生になると6年生までであるカラクルの小学校に通わなければならない。カラクル小学校は、スバシ村からは遠いため徒歩での通学はできず、馬か自転車を利用するかもしくは同地に寄宿するかしなければならない。卒業後初級中学に進学するには、アクトにあるブルンケル公社スバ

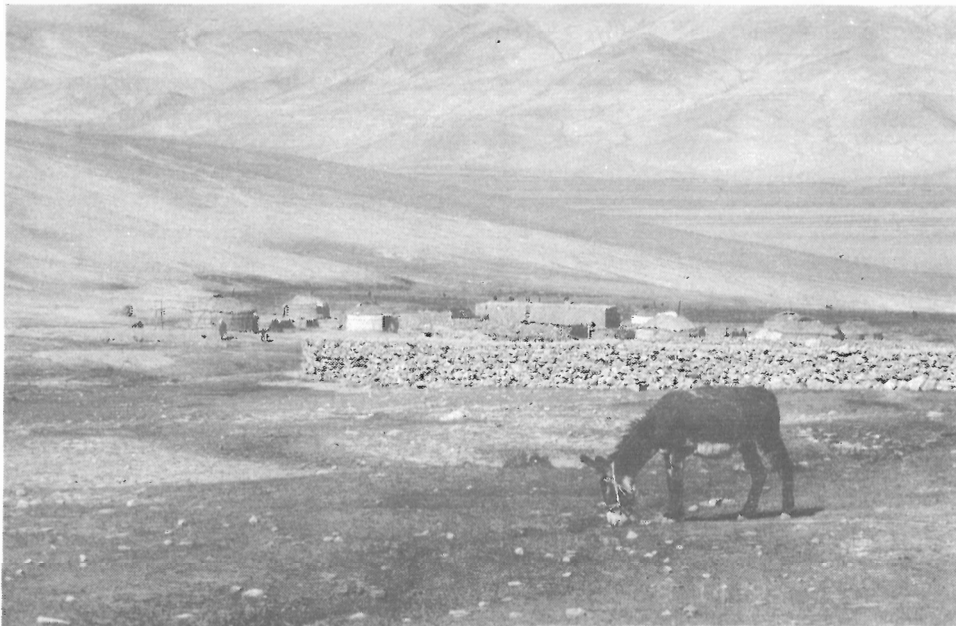


図2 夏営地ジャンブラック全景



図3 ジャンブラックのこどもたち

シ大隊の中学に、同地に寄宿して通うことになる。負担は小さくないようだ。

あるパオに、セイプラーというカラクル小学校の先生がいた。教員の給料が低く生活の資の助けのために、夏の休暇中のみ放牧にきているという。その先生からの聴き取りからえたカラクル小学校の実情は以下の通り。

6年制の小学校で、使用言語はキルギス語である。児童数175人に対して、教師数8人に校長、それに用務職員が3人。1年生が2学級ある他は1学級編成である。

カリキュラムは中国の中央政府によって決められたそれと基本的に変るところはない。つまり北京の小学校のそれと変わらないということである。ただ漢族の小学校の国語（漢語）に代えてキルギス語を教える「語文」があり、「外国語」に代えて「漢語」がおかれることの違いである。もちろんその相違自体、少数民族居住区の学校への措置として中央政府が決めた制度にほかならない。教科書についても、中央政府の教科書をウルムチの教育委員会（新疆ウイグル自治政府）がそのままキルギス語に翻訳したものを使っているという。

教育上とくに力をいれている重点の科目は、セ

イプラー先生によれば、(1)算数、(2)漢語（中国語）、(3)思想品德（道徳科に相当）、(4)語文（キルギス語の文法や作文）の順であるという。(2)を外国語、(4)を国語とおきかえれば、北京とあまり違いはないであろう。なお中学での使用言語はウイグル語であるが、キルギス語はウイグル語と7割程度重なるから、小学校でウイグル語の授業がなくとも中学校進学にほとんど支障をきたさないという。

教育内容が中国全土で画一的になっているということは、少なくとも学校においては当該民族や宗教に固有の教育は行われていないことを意味している。事実まったく行われていないという。したがって、フンザでも同様であったように、ここでもかれらが学校教育を受けるということは、自らの属する民族の文化や生活のコンテキストとは異質の文化的コードを学習することを意味する。義務教育とはそれを強制する制度にほかならず、それが国家の名において正当化されている。北京から数千キロメートルもはなれ、宗教（イスラム教）も民族も文化も生活もまったく隔絶したこの辺境地の子どもたちに対して、中国政府はひとつの「国民」教育を貫徹しているわけである。義務

教育が近代国家の採る国民統合の最重要の手段であるかぎり、現代の中国という多民族国家においても、教育という手段を手放すことはないわけである。

ただしカラクルの小学校の教育水準はたいへん低いという。教育の目標は3R'S（読み・書き・算数）ができればそれでよい、とセイプツラー先生がいうことにそれは端的にあらわれていよう。上級学校への進学をほとんど念頭においていない。キルギス族は文化水準も教育レベルも低く、上級学校への進学率はほぼ5%程度にすぎないという。大学への進学者は少なくとも1980年以来（つまり同先生の就任以来）ひとりもないという。それは経済上の問題ではなく、子どもの学力が達しないことが主な理由である。教員の質もたいへん低いという。キルギスの子どもたちの教育条件は、都市の子どもにくらべてあらゆる点で著しく劣っていると、教育環境の面でまことに悲観的な現状認識であった。

こうした教育の低水準の状況は、実はさらに中国社会にねざす、より根本的な問題とかかわっているということも、同先生は指摘する。仮に高等教育を受けたとしても、キルギス族であるかぎりまともな仕事はまわってこないというのである。われわれも中国を、少数民族の多い西から漢族の中心の東への旅を続けることである程度見聞・観察できたが、中国では民族による階層的秩序が漢族を頂点にして厳然と存在しており、社会の要職はほとんど漢族がしめるシステムができあがっている。キルギス族は、そうした秩序のいわば底辺に位置しているようにみえる。だからキルギス族は、仮にひとたびは教育による社会上昇の夢をみたとしても、いずれは帰郷して放牧の仕事につく結果になることがあまりに多いというのである。とすれば、辺境地の少数民族にまでもれなく徹底されている中国の「国民」教育は、少数民族にとっては、決して社会的上昇の階梯につながっているものではない。この点は、これによっても明らかであろう。

ただこのように教育水準が低いとはいえ、学齢期の子どもが学校へ行くのは当然という共通認識は成立している。つまり義務教育就学率は現在では相当高い。ジャンブラックに来ていたスバシ村

住民のうちにも、大都市カシュガルの親戚に子ども（ただし男の子のみ）をあずけて都市部の学校に通わせている家庭もあった。不利な教育条件を克服しようという努力のあらわれとみられる。いかに現実の社会が少数民族を疎外しようとして、学校教育には、つねに社会的上昇への“幻想”をかきたてるだけの魅力（魔力？）がひそんでいるのである。

おおむね子どもの教育については、できるだけ高等教育（可能であれば大学まで）を目指す上昇志向派と、キルギス族は中国では所詮成功できない、だから最低生活がとりあえず可能な牧畜が結局よいといったいわば諦観派と、おおきくふたつの考え方があつた。

ちなみに教職にある40歳のセイプツラー先生の経歴を確認しておこう。スバシ村の生まれで、カラクル小学校で5学年を終え、アクト県の中学校（初級・高級あわせて5年）で10学年まで学び、アートシ自治州（キルギス族の自治州）の師範学校で2年の修学を終えてキルギス族のカラクル小学校の教師の資格を得た。しかしそれで満足することなく、カラクル小学校教師を続けながらさらにラジオ師範学校（主に中学校の先生を対象とした一種の通信教育）で3年間勉学を続けながら、各科目の試験を順次及第して、大専門という学位（大学の下の学位）を得たという。現在語文の科目長をつとめている。ずいぶん努力した地元の先生である。しかし学校教員として得られる給料だけでは家族を養うに十分ではないという。ひつじ20頭、やぎ5頭、ヤク10頭、馬とロバ各1頭の家畜を飼っているが、その家畜数は村の平均よりやや少ない。なお夏以外はスバシ村の人に謝礼を出してその家畜の世話を頼んでいるという。

### 3 えがかれているライフコース

われわれは、すべての「家族」を戸別訪問して聴き取りの調査をおこなった。それらの情報をもとに、以下おもにかれらの描くライフコースや子どもの教育についての考え方を整理した。

われわれの調査の限りでは、この地で零細な放牧に生きる自らの生活の現状を積極的に肯定している住民は、ほとんどいなかった。ただ一人の例外は、「昔に較べたらなんでもあり、また食うに

困るわけではないから、現状に満足している」というかなり老けて見える60歳の老婦人のみであった。それ以外の人は口を揃えて、できればここでの生活から脱出したいとの意向を洩らしていた。都市からほとんど隔離されたこの標高4000メートル近い山岳地帯で、草地も十分でない放牧の生活は、おおいに苛酷である。真夏の8月でさえ朝には氷が張っていたが、冬はほとんど雪と氷におおわれ、人の往来は絶えるにちがいない。広大に見える放牧地も自由に利用できるわけではなく、人民公社によって割り当てられている。放牧地の面積こそ広くとも、草の葉は堅くて短かく、質は悪い。そのうえ、一面に密生しているわけではないので、量も少ない。飼料となる草の量が公権力によって制約されている以上、結果的に村で放牧(飼育)できる家畜数の上限もおのずから限られてくる。放牧によるかぎり、住民各自の努力によって富を増大させることは制度上困難なシステムになっているといわざるをえない。

こうしたなかで住民が現状に不満をいдаくのも無理はない。ではかれらはそこからの脱出の可能性をいかなる形で考えているのか。われわれの聞き取りと観察の範囲では、おおむね以下のような

タイプに分類ができる。

(1) キルギス族の伝統的生活意識を堅実に守りつつ、脱出の期待を子どもに託そうとしているタイプがある。このタイプの人はおおむね勤勉で誠実であった。子どもにたいしては能力の可能な限り高等教育まで受けさせ、社会的成功を期待している。

(2) 生業(牧畜)にあまり身を入れず、外来者との小ビジネスによってひとやまもうけることをうかがうタイプ。中把公路(パキスタンのカラコルムハイウェイは、中国ではこの名でよばれる)の外国人への開放以後、ムスタグアタ山(7546<sup>米</sup>)やコングール山(7719<sup>米</sup>)などの名峰がそびえるこのパミール山岳地帯には外来の登山者やトレッカーがさかんにはいつてくるようになった。また車で2時間程度の距離にある美しいカラクル湖が観光地として政策的に売出され、都市からの観光客が急増している。こうした登山者や観光客に接近し、両替やみやげもの(婦人たちの手になる独特の図案とカラフルな刺しゅうの手工芸品など)販売等の安直なビジネスによって現金を得ようとする者たちがこのタイプである。かれらはキルギス族の質素で伝統的な生活様式や秩序を乱し

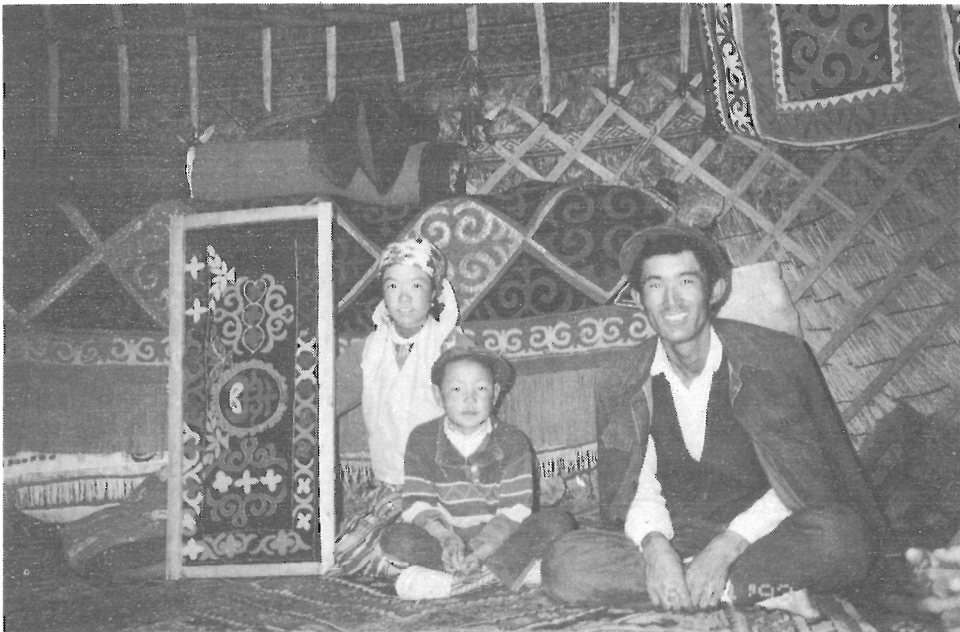


図4 パオ内部：キルギスの家族と刺繍

つつあるかに見える。生業に身をいれず小ビジネスに走る息子の生きかたをめぐる、老父とうまくいっていない家族を、偶然われわれは垣間見る機会があった。そのかれは外国人たるわれわれにもしつこくつきまどってきた。

(3) 放牧という生業を捨て、村を出て都市へ流れて行くタイプ。ジャンプトラックにも大都市カシュガル（人口25万人余り、車で半日の距離）に肉親や親戚がでていったと語ってくれた者が2・3人いた。ただかれらは都市（カシュガルほか）にでていって、はたしていかなる生活をしているのであろうか。その実情は不明だが、おそらく成功者は少なく、ほとんどは都市の底辺層を形成しているにちがいない。

なおスバシは、美しいムスタグアタの登山基地に位置し、近年登山者が顕著に増加しているにもかかわらず、パキスタンのフンザと異なり、登山ガイドなどのエクスペディションガイドの職業化は見られない。中国（少なくともこの辺境地）では外国人と接触するガイド等の職業は、いっさいを政府が管轄し民間の自由に任すことはないためである。

#### 4 パミールの南北：フンザとスバシ村の比較

われわれは、パミール高原および中パ国境をばさんで南北に位置するふたつの地点、フンザとスバシで調査を行った。フンザでの調査の報告は、別掲論文（辻本、1994）を参照されたい。ここでは両地点の簡単な比較をこころみ、それを通じてうかがいあがってくるいくつかの問題点を整理して、まとめたい。

まず両地点のおかれた状況の共通点を指摘しておきたい。第一に、両地点は車でゆうに一日以内で行き来できる近さの、パミール高原の南北に位置している。ともに高所辺境地であり、住民はいずれも国家（パキスタンと中国）のうちにおいては少数民族に属し、かつ宗教的にも少数派である。ともにムスリムであるが、フンザはシーア派のうちのイスマイリー派、スバシ村はイスラム教の何派であるかの自覚は住民にはまったくない。また両地点とも自然の環境はきわめて苛酷でありその自然環境に適應しながら住民内部で助けあってさ

さやかに生きている。生業の形態は異なるものの、生活水準はともに低く、いまだ近代的物質の豊かさにはめぐまれていない。

第二に、両者をとりまく近年の状況は共通してともに大きく変貌している。カラコルムハイウェイおよび中巴公路が通じ、しかもいまや一般人や外国人の入域が許可され、外部に向かって開放されている。その結果、中パ間の貿易や人の往来が活発になり、さらにパミール地帯の自然の豊かさを背景に観光や登山の客が急激に増加し、ビジネスチャンスは飛躍的に拡大している。もはや人の往来の稀な“秘境”ではない。

とはいえ、いずれも中央政府からはほとんど見捨てられた、いわばけしつぶほどの小さな存在にすぎないということを、第三の共通点として付け加えておかなければならない。地理的、経済的、人口数、民族、宗教、文化、生活など、いずれの面においても、両者はそれぞれの国家のうちではほとんどとるにたらない最辺縁部に位置している。

以上のようなおおくの共通点や事情があるにもかかわらず、両者の現在の意識とスタンスは実に対照的な様相を見せていることは、興味深い。

フンザは、なによりもまず、生き残りをかけた明確な展望と戦略をもっている。決して閉塞的ではない。宗教的共同意識にもとづき、教育を有力な手段とした「近代化」文明化の方向が浸透している（辻本、1994）。

一方スバシのキルギス族は、民族的にも宗教的にも求心力を欠き、危機意識の共有があるようにはみえない。一様に自らの現状を否定的にみているながら、そこからの出口がみえていないように思われる。少なくとも一定の方向性の共有は感じられない。したがって近年の外からの契機による社会的変貌に対しても、受動的で、皮相な末端的対応しかできていない。その結果、外部的勢力（政府や都市消費経済勢力）に対して主導権をもちえず、逆にかれらに使用される底辺労働者を形成しているにすぎない。このままでは、スバシ村等の中国領のキルギス族は、じり貧的に衰微していくにちがいない。

では、ここでのキルギス族はなぜ主体的になれないのだろうか。

ひとつには、歴史的につねに遊牧生活を営んできた民族性の問題があるかもしれない。遊牧という生活形態は定住民を前提にした国家の枠組みとは相いれないからである。その意味からも決定的な要因として、中国という強大な国家権力の規制力を考えないわけにはいかない。先に「中央政府から見捨てられた」と述べたが、それは中央政府の支配力が弱いということを意味するものでは決していない。たとえば牧草地さえ自らの自由にならず、人民公社を通じて割り当てられていた。外国人のトレックガイドや観光事業も国家組織が独占し、かれらのすぐ身近に進行しているビジネスチャンスをかれらが独自に生かす活動は許されていない。しかもその国家組織のいわゆる「幹部」を漢族が独占する官僚のシステムが、ほとんど全領域にゆきわたっている。くわえて特権的民族たる漢族が、みずからの特権を徹底的に再生産するシステムも備えているのである。ちなみにわれわれは、カシュガルでようやく許可されて小学校を訪問したが、その小学校ははからずも漢族を中心とした「幹部」の子弟が優先的に入学する「重点学校」であった。パラボラアンテナを2基もそなえた充実した施設と優秀な教員が配置された、見る

からに特権的な学校であった。すくなくともキルギス族の生徒が在学する形跡はなかった。

要するに「見捨てられた」辺境地のキルギス族も、強力な中国の官僚支配下にしっかりと組込まれているのである。

それに比べ、パキスタン政府は国家的機能が十分にフンザ地方まで及んでいない。少なくとも中国にみられるような官僚支配や国家的規制力は強力ではなく、むしろ自由に放置されているというに近い。

以上の指摘をふまえるなら、国家というシステムは、少なくとも少数民族にとっては、抑圧的機構そのものであるといつてよい。たとえば米ソ2大国家による東西冷戦という国際秩序は国家的支配を強化する構造をもっていた。その冷戦構造が終焉するや、世界各地で民族紛争が続出してきたが、それは冷戦下の強力な国家のシステムがいかにか少数民族を抑圧していたかを明白に物語るものにほかならない。

## 5 国家と宗教と民族と

以上、中国のキルギス族は、中国という国家機構のもとで抑圧されていることを述べてきたが、



図5 出会った若きアホン（後方右）



かれらには、出口をもとめる動きはないのであろうか。

ジャンブラックで調査中、偶然訪れていた青年アホン（アホンとはイスラム教の宗教指導者）に出会った。かれはスバシ村の出身で、24歳。アクトの中学（10学年）卒業後、パキスタンとの国境に近いピラリという小さな町で宗教家に師事してイスラム教を学び、ウルムチのイスラム大学を1993年5月に卒業。帰郷して宗教的指導者として活動開始したばかりであった。かれの当面の目標はキルギス族の宗教専門学校を設立することだという。そしてそれを拠点にした宗教活動を通じて、キルギス族の生活の近代化をめざしたいという。国家機構の強力なこの中国のなかでかれの夢の実現がどこまで可能であるか、それはわれわれには未知数というほかない。しかしかれは宗教と民族の意識を自覚的にもった青年であった。われわれはかれに出会ったことによって、中国キルギスという辺境少数民族の内部にも出口を模索する動きが実際にあることを確認することができたといえよう。

結局フンザにおいてもスバシにおいても、少数民族が国家という枠組みを相対化する契機は宗教にあった。ところで、「近代国家」や「国民国家」という近代世界の秩序を形成してきたシステムが、いまあらためて問われている。そのシステムのありかたを問うということは、実は民族や宗教の問題を問うことと一体の問題であるといつてよい。この点は、以上の論述から明らかであろう。これまで日本は、この民族と宗教の問題にはおおむね鈍感であった。しかしいまやボーダーレスの時代。フンザやスバシのかかえる問題は、まさに現代のいずれの世界においても問いかけてられている普遍的問題にほかならない。当然われわれにとってもけっして他所事ではない。今回の調査は、こうした問題をわれわれにつきつけてきた。

#### 引用文献

辻本雅史「フンザの教育事情と子どもたち」、『ヒマラヤ学誌』第5号、1994：